

書評 福永武彦著『愛の試み』（新潮社、1975）（新潮文庫 ふ-4-6）

理工学研究科新領域創造専攻デジタルコンテンツ系

大洞敦史（だいどうあつし）

フランス文学で「モラリスト」といえば、人間の感情や振る舞いを冷静に観察し、得られた洞察を断章形式で書き表す作家のことを指す。たとえばモンテーニュやパスカル、アランなど。本書は西欧文学に造詣の深い小説家・福永武彦の、モラリストとしての一面が如実に表れた随筆集であり、一編が三、四頁からなる短距離疾走だ。

主題は愛、それも主として恋愛であるが、愛と同じ程度に「孤独」という語が頻出する。愛と孤独の間での彷徨、往還、ゆらぎから「情熱」や「快樂」のような波しぶきが上がる。

「愛とは魂の燃焼の状態」と著者はいう。情熱を炎になぞらえるレトリックは古典的であるが、著者は更にその燃焼の有り様を次のように語る。「魂が燃え上るとは相手のために自己が燃えることで、相手によって自己が燃えることでも、また反対に相手を燃すことでもない」。燃えるとは即ち形あるものが灰燼に帰していく過程を意味する以上、筆者はこの一文を咀嚼して、愛とは自己滅却へと向かう修行であるとの認識を得た。

修行と呼んではみても、もしも相手も自分に好意を抱いてくれているのならば、相手のために自らを燃やす試みは、けっして衰える事のない歓びをもたらしてくれるだろう。けれど「肉体的な快樂は繰返されることによって効果を減じる」が「精神的な快樂は繰返されることによって洗練され得る」からである。

相手の視野の内に自分がいない場合は、間断なく押し寄せ来る孤独や寂寥の嵐に身をすくめて耐えねばならない。ところが著者にとって孤独とは、実は大変に積極的なものである。それは二つの魂を引き寄せ合う磁力であり、「弱い孤独によって愛した人間は、その愛もまた弱いのだ」。愛の試みとは、孤独から逃れられぬよう宿命づけられているかに見える人間の、反抗であり挑戦であり賭けである。誰かの孤独に向けて自らの孤独を^{ほとぼし}迸り出すことである。それには孤独を恐れ、かき消そうとするのではなく、むしろいかにそれを凝視し、^{つよ}靱く保つかが課題となる。本書を読んで愛が実るわけではない。が、愛する為の勇氣を与えてくれる。



明治大学図書館
MEIJI UNIVERSITY LIBRARY